

文化間移動をする子どもの自尊感情を高めるためのアプローチの検討と提案

AKEDAN ABUDOU（東京学芸大学 教職大学院）

1. 背景

本研究は、文化間移動をする子ども（齋藤・佐藤，2009）の自尊感情を高めるための実践的支援について、学習面、教師との関係、友人関係という多面的な視点から検討した実践報告である。対象は、中国語を母語とし、日本の小学校6年生に在籍するSである。Sには自信の低さ、他者評価への過度な意識、頻繁な保健室利用、学習活動への消極性などの様子が見られた。これらの実態から、自尊感情を基盤とした支援の必要性を研究の出発点とした。

2. 先行研究

自尊感情は「自己の全体的評価に対する肯定的または否定的態度」（Rosenberg, 1965）と定義される。また、文化間移動をする子どもは、言語的・文化的背景の差異や自己表現の困難さから（ローレンス，2008）、自己評価やアイデンティティ形成に影響を受けやすいことが報告されている（ローレンス，2008；太田，2012）。

自尊感情の形成には、学習経験、教師との関係、友人関係、家庭環境など複数の要因が相互に関係することが示されている。自尊感情を育むためには、授業での成功体験の積み重ね、目標と達成過程の承認（古市・柴田，2013）、教師による丁寧な関わりと努力過程の評価、友人との相互理解や感情共有（東京都教職員研修センター，2011）、保護者による努力や主体性の承認（鹿児島県教育委員会，2020）が有効である。以上より、自尊感情の向上には、学習指導・教師関係・友人関係・家庭を含めた多面的支援が必要である。

3. 研究目的

本研究では、学習面と人間関係に着目した自尊感情を高めるアプローチが、文化間移動をする児童に有効であるかを検討し、実践への具体的な取入れ方を明らかにすることを目的とする。

4. 研究方法

本研究は、小学校にボランティアとして参加した立場から行った参与観察を中心としたケーススタディである。観察期間中は、対象児の在籍学級において実習生として学級全体の活動を支援し、Sくんを含む児童への学習支援に関わった。授業、休み時間、集団活動など学校生活全般における学習の様子、友人関係、教師との関わり、行動や発言の変化を継続的に観察・記録した。合わせて担任と情報共有を行い、必要に応じて個別の関わりや学習支援を実施した。対象児童Sに対しては、段階的な観察（非構成的・自然・焦点的観察）を通して実践を把握し、継続的に2024年9月から2025年11月まで支援を行った。

支援内容として、次のような支援を行なった。A) 様々な場面での声かけ（褒める、励ます、叱るなど）を行い、日常生活や学習面で安心して取り組めるよう支える。B) 授業中に声かけ支援を行い、理解の確認と補助説明を行う。C) 担任と連絡ノートなどを通して情報共有と連携を図る。D) 母語言語支援を取り入れて内容理解を促す。E) 悩み相談に対応して心理的な支援をする。F) 苦手科目の支援を一对一で行う。

5. 分析方法

本研究では、観察記録、日誌、連絡帳から児童の発言と行動を抽出し、学習面、教師との関わり、友人関係の三つのカテゴリーに分類して分析した。分析は、ポジティブな自己認知が自尊感情の向上につながるという視点に基づいて行った。学習面では参加度や「できた・わかった」という反応、教師との関わりでは肯定的な声かけやフィードバック、友人関係では日常場面での態度や行動の変化に着目した。

学習面では当初、集中力の低下や忘れ物、学習への不安や消極的発言が見られ、自己効力感が低い状態にあったと考えられる。しかし、理解度に応じた個別支援の継続により、発言や取り組む姿勢に前向きな変化が見られ、成功体験が学習意欲の向上に繋がった。教師との関わりでは、連絡帳による記録共有と協働的支援を通して児童理解が深まり、担任の指導の見直しが見られた。友人関係では、受容的な関わりと段階的な働きかけにより、学級活動への参加が増加した。

学習面、教師との関わり、友人関係への支援により、Sくんの学習意欲や学校活動への参観は向上し、学校生活への適応も進んだ。支援開始当初の2024年9月～10月中頃までは欠席や保健室の利用が頻繁であったが、2024年10月22日以降～2025年10月までは病気により欠席間なく、保健室利用もほとんどなかった。2025年10月下旬からは、支援終了に不安を感じたSくんが再び保健室利用し、「支援が終わるから、自分がどうなるかと精神的に影響を受けた」と語った。この変化は、支援の継続により学校生活への適応が安定したことを示すとともに、支援終了時の心理的影響も考慮する必要があることを示唆している。以上より、多面的な支援の継続がSの学習意欲の向上と学校への適応に寄与したと考えられる。

6. 考察

本実践では、学習面、教師との関わり、友人関係の三側面から支援を行った結果、自己評価の向上と前向きな行動の増加が見られた。理解度に応じた個別支援と成功体験の積み重ね、傾聴を重視した関係づくりが有効であった。これらの多面的支援は、他の文化間移動をする子どもにも応用できる可能性がある。自尊感情を高めるには、児童の背景や課題を丁寧に把握し、意図的・計画的に支援することが重要である。学習では個別支援と成功体験、人間関係では関わり場の設定、さらに母語支援を組み合わせることで、不安の軽減と主体的な参加につながった。多面的で計画的な支援の有効性が示された。

【引用文献】

太田裕子（2012）「『移動する子ども』は他者との関わりの中でことばとアイデンティティをどのように形成しているか—幼少期より日本で成長したある高校生の事例から—」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』3, 25-48.

齋藤ひろみ・佐藤郡衛（編）（2009）『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房.

古市裕一・柴田雄介（2013）「教師の賞賛が小学校の自尊感情と学校適応に及ぼす影響」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』154, 25-31.

デニス・ローレンス（2008）『教室で自尊感情を高める』（小林芳朗 訳）田研出版.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.